



くらはし

舞鶴市立倉梯小学校
学校だより1月号
令和8年1月8日

新しい年に考える、言葉と人の絆

新しい年の幕が上がりました。澄み切った冬空に初日の光が差し込み、校庭の木々も凜とした空気をまとっています。皆さまにとって、2026年が健やかで、笑顔に満ちた一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。

年の初めは、心を新たにする節目です。書初めや初詣、鏡開きなど、古くから続く新春の行事があります。どれも「新しい一年をどう生きるか」を静かに問いかけてくる営みです。

新年のニュースでは、AI活用をはじめとする情報化や国際化の進展が大きく報じられています。私たちは世界のどこにいても瞬時に連絡を取り合える時代に生きています。物理的な距離は、かつてないほど縮まりました。しかし、その一方で、人と人との「心の距離」はどうでしょうか。SNSでは「あけおめ」「ことよろ」といった短い言葉や絵文字で済ませることが当たり前になりつつあります。便利さの裏側で、心のつながりが希薄になっていないか——そんな問いが、私の胸に去来します。

先日、十数年前に卒業した教え子から一通の手紙が届きました。思春期の悩みをよく相談していた子で、友達との関係や家族のことに心を痛めていた姿を、今も鮮明に覚えています。しばらく音信不通でしたが、便箋に綴られていたのは、元気に過ごしていること、新しい家族に恵まれた喜びでした。その文面を読んだ瞬間、長い空白を飛び越え、私の心は喜びで満たされました。言葉には、心の距離を一瞬で縮める力がある——そのことを改めて感じた出来事でした。便利な時代だからこそ、手紙という「時間をかけた言葉」が、より一層尊く思えます。

子どもと大人では、時間の流れ方が違うといわれます。子どもにとって一日一日の密度は大きく、その時間は成長に直結します。しかし、スマホやゲームに夢中になると、時間を忘れてしまうこともあります。全国学力学習状況調査の結果から、スマホやSNSの利用時間が長いほど読書の時間が短く、逆に利用時間が短いほど読書時間が長いという傾向が示されています。さらに、読書時間が長いほど学力は高いという根拠もあります。興味深いことに、大人に近づくほど、スマホ・SNSと読書の時間は共存する傾向が見られますが、子どもの時期はそうではありません。昨年12月には、世界で初めて、オーストラリアで16歳未満のSNS利用を禁止する法律が施行されました。こうした動きの背景には、子どもの成長にとって何が大切かという問いがあるのでしょう。

もちろん、デジタル機器は現代の生活に欠かせないものです。しかし、子どもたちの暮らしの環境を整えるのは、私たち大人の責任です。もしかしたら、10年後の世界から2026年を振り返ったとき、今の選択が大きな意味をもつのかかもしれません。だからこそ、今一度、言葉を深く味わう読書の時間を大切にしたいと思います。ページをめくりながら物語に没頭する時間は子どもたちに「想像する力」「感じる力」を与えます。それは、心の距離を結ぶための基盤にもなるでしょう。

新年の始まりに、私たち大人も子どもも、心の距離を大切にしながら、時間の使い方を見直してみませんか。言葉を交わし、思いを伝えること——それが人と人をつなぐ最も確かな方法だと思います。SNSの短い挨拶も悪くはありません。でも、時には手紙や対話で、心を込めた言葉を届けてみたいものです。その一言が誰かの心を温め、距離を縮める力になるはずです。

新春の冷たい空気の中で、久しぶりに登校した子どもたちは、未来への希望そのものです。今年も、皆様とともに、子どもたちの健やかな成長を支えてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

校長 四方 直人